異世界と鋼鉄の旅人

シール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界と鋼鉄の旅人

【Ｎコード】
Ｎ８６２０Ｌ

【作者名】
シール

【あらすじ】
「私は貴殿に逗留を望む。代償はドリス・ベルセリウス、この私の全てだ」
異世界に召喚され、全ての支援システムを失った情報士官エルはまだ幼さを残す女王との契約に応じ、絶望的な状況におかれた連合王国を勝利に導く為、行動を始める。
主人公最強系・ハーレム要素がありますのでご注意ください。

一話　旅人は逗留を選ぶ

戦う為に生まれてきた。
部下を引き連れて、オールドの戦闘機群と果てのない戦闘を続ける日々。
その日も、男は旧カゴシマ領で、戦火の中に身を投じていた。
そのはずだった。

強い風が吹く。
男は、その事実に驚いた。強い風ではあったが、その風の中に見慣れた赤い砂は一切含まれていなかった。ただ心地良い純粋な風が頬を撫でていく。
柔らかい風の感触を楽しもうと、男はゆっくりと目を瞑った。しかし、男の楽しみを阻害するように、周りを雑音が満たしていく。
「旅人一名の召喚を確認！」
「天は我らを見捨てなかった！」
「成功だ！」
雑音が聴覚を支配していく。
不快感に眉を潜め、男はゆっくりと目を開けた。
原っぱ。そして、突き抜けるような青い空。周りを囲む群衆。
「黒耀の瞳に漆黒の髪！　旅人様だ！」
誰かの叫び声。次いで歓声が轟く。
男はゆっくりと群衆を見渡した。そこには、男の見慣れた東洋人の姿はなかった。
「救世主様！」
後ろから女性の歓声。ゆっくりと三六〇度全体を見渡す。四方が群衆に囲まれ、老若男女問わず、全員が熱狂的な歓迎の言葉を男に投げかけていた。その全てが、西洋人に見えた。
一歩足を踏み出し、空を仰ぐ。どこまでも続く青空。男はこれほ

ど澄んだ空を生涯一度も見た事はなかった。
空を眺めながら、もう一歩足を進める。しかし、見えない障壁に阻まれて、男がそれ以上前に進む事はできなかった。
足元に視線を落とす。直径一メートルほどの白い円が男を囲むように描かれ、発光している。
男は手首に取り付けられた小型端末を口元に寄せて、口を開いた。
「こちら第三陸上師団Ｌ－ｆｆｂ２。旧カゴシマ領にて展開中、ポジション・ロスト。世界測位システムによる支援を要請する」
小型端末は反応しない。ディスプレイには通信エラーを示すＥの文字がはっきりと浮かんでいる。
「こちら第三陸上師団Ｌ－ｆｆｂ２。未知の現象に遭遇。新たな攻撃方法が確立された可能性がある。支援を要請する！」
叫ぶ。それでも、小型端末からは何の反応も返ってこない。
「こちら第三陸上師団――」
男の叫び声をかき消す様な歓声が轟く。
「我らに救いを！」
「救済の手を！」
「救世主様！　救世主様！」
雑音が肥大化していく。
喧騒の中、Ｌ－ｆｆｂ２は沈黙を守る小型端末に向かって叫び続けた。しかし、一向に端末が機能する様子はない。
Ｌ－ｆｆｂ２は小型情報端末に呼びかけるのを諦め、腰のホルダーから汎用情報端末を取り出した。素早く座標確認の命令を入力する。しかし、何度試してもＥｒｒｏｒの文字が返ってくる。エラー内容をロング情報で引き出すと、衛星が見当たらないと答えが返ってきた。Ｌ－ｆｆｂ２の顔に険が混じる。
Ｌ－ｆｆｂ２は端末から目を離し、再び目の前に広がる群衆を見やった。Ｌ－ｆｆｂ２を囲むように、群衆の輪が広がっている。皆一様に歓喜の表情を浮かべていた。
Ｌ－ｆｆｂ２は慎重に群衆の装備を観察した。全員がお世辞にも

機能的とは言えない布を身に纏い、どれも鮮やかな色で彩られている。そこから何らかの統一性を見出すことは難しい。
その殆どが非戦闘員である事を確信する。Ｌ－ｆｆｂ２は群衆を脅威ではないと判断した。
歓声が響き渡り続ける。Ｌ－ｆｆｂ２は騒ぐ群衆に中に一つの特異点を見つけた。全身を黒いローブで覆い、顔をフードで隠している男だけが周りの群衆のように騒がず、何かを待つように身じろぎ一つしない。
Ｌ－ｆｆｂ２はじっとローブの男を眺めた。
不意に鐘の音が響く。同時に群衆の歓声が爆発する。
鐘の音に反応するようにローブの男が群衆の輪から一歩前に踏み出した。
再び鐘の音。
Ｌ－ｆｆｂ２が背後を振り返ると、そちらでもローブを纏った男が群衆の輪から一歩前に出ていた。
二つの方向から挟むように迫るローブの男を注意深く観察する。二人が身に纏っているローブには鳥の形を模した金色の刺繍が入っていた。ローブの男たちを脅威と判断する。
更に鐘の音。
三人目のローブを纏った男が群衆の輪から歩を進めてくる。
群衆のあげる歓声は止まない。
Ｌ－ｆｆｂ２は右手首にはめられた小型情報に再び視線をやった。通信が開く様子はない。統合参謀本部の支援は一切受けられないということだ。
世界測位システムによる座標固定が不可能な以上、Ｌ－ｆｆｂ２の持つ電子デバイスにはいくらかの制限がかかる。
例えば、遠隔警戒システム。半径五〇キロメートルまでの範囲を飛び回り、カメラ映像をＬ－ｆｆｂ２に送る単純な警戒システムだが、これは通常二つで一セットとして使う。カメラを通す以上、奥行き情報が失われ、警戒対象の正確な座標を知る事ができなくなる

為だ。遠隔警戒システムを二つ使用することで二つの遠隔警戒システムの世界座標とベクトルから警戒対象の世界座標を求める事が出来る。しかし、これは二つの遠隔警戒システムの世界座標が分かっていなければ意味がない。世界測位システムとのコネクションが取れない以上、パーソナル測位システムを代用することになるが、こちらは精度が悪い。あらゆる電子デバイスの機能が制限され、能力が落ちていると考えなければならない。

また鐘の音が響き渡った。

四人目のローブを纏った男が群衆の輪からＬ－ｆｆｂ２のもとへ歩み寄ってくる。

四方を囲むローブの男たちを油断なく見渡しながら、Ｌ－ｆｆｂ２は自身の持つ様々な戦術データを洗い出し、その再評価を高速で始めた。

頭の奥で、警鐘が鳴る。支援システムを失うなど、Ｌ－ｆｆｂ２は経験した事がなかった。度重なる未知の事態に、Ｌ－ｆｆｂ２の処理能力が悲鳴をあげ始める。

Ｌ－ｆｆｂ２が自身の戦術価値を再評価し終えた時、四方を囲むローブの男達が両手を天に掲げた。

「――彼に恵みを、彼女に死を。天を衝くは、彼の慟哭。天を抜けるは、彼女の悲しみ。二人を別つは、天の采配――」

突如、ローブの男達が謳う様に言葉を紡ぎ出した。それが流暢な日本語であった為に、Ｌ－ｆｆｂ２は眉を大きく寄せた。四人の合唱が始まるとともに群衆の歓声はピタリと途絶え、歌が場を支配する。

「――幾億の世界を超え、旅人は静謐なる世界に辿りつく。彼と彼女の祝福は呪いとなりて、旅人に――」

不明瞭な歌を紡ぐ男達を前に、Ｌ－ｆｆｂ２は警戒態勢を崩さなかった。一見何の意味も持たない民族的な儀式に見えるが、それに留まらず実際的な効力を持つ呪い、つまり催眠や暗示の類である可能性は捨てきれない。Ｌ－ｆｆｂ２は論理神経を研ぎ澄ませて可聴

域を調整し、異常な低周波音や超音波が出ていないかを調べた。量子化に伴う計算量が急上昇し、僅かに思考力が鈍るのを実感する。不快感を伴う警告信号が全身を駆け巡り、あらゆる不要な機能が次々と停止を始める。そうして新たに確保された論理リソースをＬ－ｆｆｂ２は全て可聴域の拡大に注ぎこんだ。しかし、それでも男達の歌から何らかの異常な信号を検出する事は不可能だった。すぐに聴力の拡大に回していた論理リソースを解放し、一般的な可聴域に潜む音声成分に何らかのメタメッセージが含まれていないかを検出する。それでも、異常は見当たらない。

Ｌ－ｆｆｂ２が持てる力の全てを使って男達の歌を分析している間に歌はいよいよ終わりに近づき始めた。

「――そして旅人は辿りつく。相克の果てに、旅人は何を見る、汝は何を求める！　ここに主の力を！」

四人の男達が歌の終わりを知らせるように力強く叫んだ時、異変が起こった。Ｌ－ｆｆｂ２の身体から力が抜け、その場に立っていられなくなったのだ。膝をつき、Ｌ－ｆｆｂ２は必死に障害の原因を探ろうと試みた。しかし、その試みも虚しく、膝をつくのも辛くなってＬ－ｆｆｂ２は青々とした草むらの中に身を伏せた。そのすぐ近くで草を踏みならす音。Ｌ－ｆｆｂ２は最後の力を振り絞って、音の方に首を向けた。ローブを纏い、フードで顔を隠した者が光を背に受け、Ｌ－ｆｆｂ２を見下ろしていた。

「――お前」

不意に人影から言葉が紡がれた。それが、凛々しい女のものだった為、Ｌ－ｆｆｂ２は驚いた。

――女？

疑問が頭を掠めた時、人影がフードを脱いだ。直後、鮮やかな金色の髪が風になびいた。

「私はリンラード連合王国、女王ドリス・ベルセリウス。お前の名は？」

風でなびく金色の髪の間から翡翠の双眸が覗き、鋭い眼光がＬ－

ｆｆｂ２を射抜いた。Ｌ－ｆｆｂ２はその瞳に囚われたように身動きを取る事が出来なかった。

――子ども？

自らを女王と名乗った女は、まだ幼さを残す少女だった。しかし、纏う空気は決して子どものそれではない。凛々しい意志を宿した翡翠の双眸をじっとＬ－ｆｆｂ２が覗くと、ドリスは小さく首を傾げた。その可憐な動作が、さきほどまで少女を包み込んでいた不思議な雰囲気を拭いさる。ドリスは再び口を開いた。

「お前の名は？」

問われて、Ｌ－ｆｆｂ２は深く息を吸い込んだ。

「私は日本軍第三陸上師団長、コードＬ－ｆｆｂ２！　情報士官エル・フルビット！」

群衆の輪の中、エルは力強く叫んだ。相手が子どもであるという事実がエルの警戒心を幾許か削ぎ落とした為か、正体不明の相手に所属と名を明かす事に不思議と抵抗を覚えなかった。

「エル・フルビット……小さな旅人よ。私は貴殿に逗留（とうりゅう）を望む。長い、長い逗留だ。そして、それは決して居心地の良いものにはなるまい。この地は呪われている。大いなる災いがこの地を呑みこもうと口を開けているのだ。しかし、それでも私は貴殿の逗留を求める。代償はドリス・ベルセリウス、この私の全てだ。私の全てを捧げる代わりに、貴殿に逗留を求める。彼と彼女の名に於いて、ここに旅人と契約の印を！」

少女、ドリスが声高らかに叫ぶ。直後、光の螺旋がドリスとエルを包むように吹き荒れた。エルは、その未知の現象に目を大きく見開いた。強い風が吹き、ドリスの髪が乱れる。

「契約に応えるならば、手を」

ドリスはそう言って、地に伏せるエルに手をさしのべた。

エルは光の螺旋に包まれながら、ドリスの瞳にじっと魅入った。ドリスの持つ翡翠の双眸は、エルが今までに見たどんなものよりも綺麗なものだった。この場を取り巻く理解を超えた状況・現象の全

てが頭の隅に追いやられ、ドリスの言う言葉の意味もわからぬまま、エル・フルビットはドリスの翡翠の瞳を見つめ続けた。ドリスの瞳には、エル・フルビットが遠い日に捨てた何かが宿っていた。エルはその懐かしさに身を震わせ、それを取り戻そうとするかのようにドリスの手に自らの手を重ねた。重なった二人の手から翡翠の光が溢れだす。それと反対に、エルの身体から何かが外に向かって流れ始めた。身体が危険を感知し、警告信号が瞬時に全身を駆け巡る。しかし、エルは少女の手を離そうとはしなかった。ドリスの小さな手をしっかりと握り、その光に身を任せるように目を瞑る。

突然警告信号がぷっつりと途絶えた。直後、全身から力が抜けて再び地に伏せる。次いで、エルとドリスを包んでいた光の螺旋が収束に向かい始めた。

地に伏せたエルをドリス・ベルセリウスはじっと見つめ、やがて深く息を吸って、周囲を覆う群衆たちに、その端正な顔を向けた。

「彼と彼女の名に於いて、ここに旅人との契約が完了した！　リンラード連合王国を覆う暗雲は瞬く間に霧散し、暖かな陽光が我々を照らし出すだろう！　黎明（れいめい）の時は近い！　ドリス・ベルセリウスはここにリンラード連合王国の復興を宣言する！」

ドリスの叫び声に呼応するように、空気が爆発した。群衆から壮大な拍手と歓声が巻き起こる。ドリス・ベルセリウスはそれに可憐な笑顔を振りまいてから、横に倒れる旅人を眺めた。旅人、エル・フルビットはまだ幼さの残る子どもだった。ドリスは少年の右腕を覆う見慣れぬ装飾品や、傍に落ちていたバッグから覗く発光体を興味深そうに見つめてから、歓声の中で謝罪するように深く眼を瞑った。

後に鋼鉄の救世主と呼ばれる少年と、黎明の女王と謳われる少女の長い旅が幕を開けた瞬間だった。

二話　旅の記憶

Ｌ－ｆｆｂ２、またの名をエル・フルビットは瓦礫の山を必死に登りながら通信機に向かって叫んだ。
「オールドだ！　オールドの無人兵器群が旧カゴシマ領に集結を始めている！」
　エルはいたる所から響く高射砲の咆哮に身を包まれながら、かつてカゴシマと呼ばれた瓦礫の山を必死に走った。前方に広がる夜空には、無人兵器群の放つ不気味な光の群れと夜空を切り裂くサーチライトの筋。
『旧カゴシマ領だけではない。旧キュウシュウ南部がオールドの戦闘機群から包囲攻撃を受けている。南部前線からの連絡はいまだにない。旧キュウシュウ前線はもう――エル、良く聞け。お前達は戦略的価値を失った。我々はお前達を回収しない。これからお前は死ぬ。遺言があれば、私が責任を持ってご家族に伝えよう』
　聞きなれたオペレーター、そして友人の震えた声を聞き、エルは高射砲の放つ轟音に負けないように声を張り上げた。
「そうだ、私は死ぬ。だが、それがどうした。私は死を恐れない。私はオールドではない。泣くな、ジェイ！　必要なのは過去ではなく未来だ！　最も効率的にオールドを撃ち落とせるポイントをナビゲートしろ！　私がお前の未来に光を灯してやる！」
　夜空を覆う無人兵器群から何かが投下される。次いで、閃光が走った。前方に聳え立ったビル群が炎に包まれて崩壊を始める。崩壊に伴う轟音に紛れて通信機の向こうから感情を殺したような低い友人の声が返ってきた。
『世界測位システムに異常が見られる。エル、お前の位置が見えない』
「電磁攻撃を受けている様子はない。私の持つ測位システムは正常な反応を返している。コネクションエラーの可能性が高い。再コネ

クションを――」
『違うんだ。世界測位システム自体は正常に動いている。でも、お前の位置だけが捉えられない』
「局所的な攻撃を受けている、ということか？」
『エル、お前は今どこにいる？　世界測位システムによれば、お前はインド洋のど真ん中にいることになっている』
「パーソナル測位システムによる局所座標は旧キュウシュウ－ＤＤ２Ａだ」
『エル応答しろ。何があった？』
「繰り返す。パーソナル測位システムによる私の局所座標は旧キュウシュウ－ＤＤ２Ａ！」
『エル！　エル！　世界測位システム上から完全にお前の姿が消えた！　応答を！』
通信機の向こうから届く友人の声に、エルは戸惑うように通信機を眺めた。どうやら、こちらの声が届いていないらしい。
『エル！　エル！』
友人の悲痛な叫び声が通信機から流れ続ける。エルはすぐにそれを切った。感傷に浸っている時間はない。今必要なのは効率的な敵の撃破だった。それが、これからも闘争を続ける友人への唯一の贈り物となる。エル・フルビットは上空に浮かぶ無人兵器群を睨みつけた。
ぐわんぐわんと上空からエンジン音が唸る。高射砲の咆哮が激しくなり、耳鳴りがした。エルは立ち止まって肩で息をしながら、再び通信機に向かって叫んだ。今度は友人宛ではなく、同じ地に立つ部下達へ。
「親愛なる第三陸上師団の諸君に告ぐ。我々、第三陸上師団は戦略的価値を失った。私、Ｌ－ｆｆｂ２はこれより単独で兵器群に対して突撃を開始する。覚悟のある者は私に続け！　そして、運良く包囲を突破できた者は生きろ。生きて、オールドどもを一人でも多くぶち殺せ！　そして、このくだらない闘争を終わらせろ！　それが

私の最後の命令だ！　進め！　突き進め！　未来を、掴み取れ！」
　エルの叫び声に応えるように、旧カゴシマ領の瓦礫の山から無数の警笛が鳴り響いた。続いて、高射砲の咆哮がつんざく。左手数十メートル先に閃光が走り、火の手があがった。それを合図にエルは雄叫びをあげ、地を大きく蹴った。前方の瓦礫の山が爆発する。土埃が降り注ぐ中、エルは怯むことなく地獄の中へ飛び込んだ。

　エル・フルビットは浅い眠りから醒めて、ベッドから飛び起きた。嫌な汗で全身が濡れている。エルは深く息を吐き、そこで自分が眠るベッドが妙に柔らかい事に気付いた。反射的に周りを見渡すと、まず赤い絨毯が目に入った。そして、次に清潔感のある白い壁に視線が移る。その壁際には木製の収納スペースらしき箱型のものが並んでいた。それ以外に目立つものは何もない。簡素な、しかし広い部屋だった。
　エルは深く目を瞑った。そして、全てを思い出す。
　旧カゴシマ領における絶望的な戦闘の最中に謎の発光体に襲われ、気付いた時には知らない場所にいた。そこはエルの知る粉塵と炎に包まれた灰色の世界ではなく、緑と青空に彩られた鮮やかな世界だった。そして、強い風が吹いた。爽やかな風だった。エルの知る風とは粉塵を舞いあげ、身に強く吹きつける障害でしかなく、あのような心地良い風を感じたのは初めてだった。
　――ここはどこだ？
　湧きあがる疑問を晴らすべく、ベッドから立ち上がる。
　そこで初めてエルは唯一の武器である戦術デバイスを失っている事に気付いた。慌てて周囲を見渡すも、戦術デバイスはおろかバックパックの姿も見えない。どうやら武器は取り上げられたらしい。
　エルは顔を硬くして、再び部屋をゆっくりと見渡した。壁にかかった淡い緑色の布が目に入る。それがカーテンと呼ばれる高級装飾品である事を思い出し、足を進める。さっとカーテンを開けると、暖かな陽光が飛び込んできた。あまりの眩しさに目を細める。そし

て、エルは息を呑んだ。
窓の向こうには、広大な緑が広がっていた。自然のものではない。人工的に整えられた、観賞の為の箱庭。
エルは数秒間窓の向こうに広がる景色に目を奪われた後、ゆっくりと窓を開けた。窓から身を乗り出し、その雄大な景色を食い入るように眺める。そして名残惜しそうに視線を下に向けると、白い外壁と一つの窓が見えた。どうやらエルのいる部屋は二階に位置するらしい。目的を達成し、ゆっくりと窓を閉める。次いで、エルはその場に崩れ落ちるように座り込んだ。
ここは旧カゴシマ領ではない。それどころか、旧キュウシュウ、更に言えば日本でもなさそうだった
――何が起こっている？
エルは全身から血の気が引いていくのを感じた。地下ゲリラでもオールドでもないエルの知らない全く別の勢力に捕まったようだった。そして、その勢力は恐ろしく豊かな土地を持っている。
――しかし、そんな事は有り得ない。
欧州には連鎖的な経済破綻の嵐が吹き荒れ、巨大な内戦が勃発している筈だった。米国は言わずもがな。ならば、印？　独？　違う。どこにも、こんな平和な世界は広がっていない。オールドとの戦いは日本だけに留まらなかった。先進国はどこも少なからずオールドの影響を受けていて、日本でのオールド排外運動が始まったのを皮切りにその火の粉は世界各国へ飛び散った。こんな勢力が存在する筈がない。
ふと、神隠しと呼ばれる民間伝承が頭を掠めた。人が何の前触れもなく消失する現象。
馬鹿な、とエルは小さく首を振った。あれは親しい者の失踪に対する恐怖や怒りといったやり場のない感情を神へ転嫁する為の幻想に過ぎない。もしくは、危険な場所に立ちいる事を禁止する為の教え。伝承とは得てしてそういうものだ。
エルは深く目を瞑り、今後の事について考えを巡らせた。逃亡、

という選択はとりあえず除外する。武器もなく、酷い扱いを受けている訳でもないのに未知の土地に逃亡するなど出来る筈がない。やはりここは向こうからの干渉を待つのが得策だろうか。

そう考えた時、背後の扉が軋みをあげた。驚いて振り返ると、開いた扉の向こうでエルと同様に驚きの表情を浮かべた少女と目が合った。東洋人ではない。東欧風の顔つきをしている十代中ごろの若い女だ。同年代の少女の姿にエルの顔から緊張の色が消える。

この未知の土地に辿りついてから、エル・フルビットは初めて小さな笑みを浮かべた。

三話　戦の前触れ

「た、旅人様！　も、申し訳ございませんっ！　まだお休み中であるとばかり……」

戸口の前で若い女が慌てたように頭を下げた。女は黒い質素な服装をしている。どうやら使用人のようだった。女が武器の類を持っていない事を確認すると、エルは極力友好的な笑みを浮かべ、小さく頭を下げた。

「丁寧な扱いに感謝する。私は日本軍第三陸上師団長、識別コードＬ－ｆｆｂ２」

「コード……エルエフ……？」

「エル、で良い」

助け船を出すと、女は安心したように小さく息をついた。

「はい。エル様、あの、私、こちらのお手紙を枕元に、と……」

おずおずと女が差しだしたものを受け取る。それを見て、エルは小さく眉を寄せた。渡された手紙は羊皮紙だった。しかし、それは決して粗雑なものではなく、柔軟性を持ち、保存性に優れているように見える。文字媒体が保存性に優れれば、それは文化的な継承を促し、文字文化の発達に繋がる。そして、羊皮紙に綴られた文字はエルの見知らぬ言語であったが、右下に紋のようなものが存在した事から、少なくともシステム化された行政構造を持つ何らかの組織に保護されている事が分かった。もちろん、どこかの未開人に保護されたと思っていた訳ではなかった為、その新たな手掛かりはエルにとって無価値に等しいものだった。

「読めない。これは何語だ？」

「リーリア語です」

「……読んでくれ」

「はい。……親愛なる旅人様へ。まずは、突然の召喚と契約について深く謝罪させていただきます。今回の……」

「待て。召喚と契約とは何の事だ」
エルの制止に、女は困った笑みを浮かべた。
「えっと、それは私のような者から話すべき事では……」
「私は君から話してもらいたい。もちろん、その君から話すべき事ではない、というのがそちら側の都合でなければ、の話だが」
エルがそう言うと、女は僅かに困惑した表情を浮かべた後、しどろもどろになりながら説明を始めた。
「あの、えっと、召喚とは旅人様をこの地に誘う事でございます。それが代々リンラード連合王国に受け継がれた役割と言われています」
「旅人とは何だ？」
「エル様のように世界を旅する者でございます。そして、旅人様を私達の世界に誘う道標となるのが王家の役目と伝えられております」
「……話が見えない。私はただの軍人だ。世界を旅した事などない。私には君が何か勘違いをしているように思える」
「エル様は紛れもなく旅人様でございます。今宵、召喚に応じてくださったのが何よりの証拠ではありませんか？」
女の言葉にエルは眉を寄せた。どうも話が噛み合わない。
「そもそも”私達の世界”、とは何だ。前世紀的な死後の世界とでも――」
女の話に出た不明瞭な部分について問い質そうとした時、外から届いた巨大な重低音がエルの声を遮った。エルは本能的にそれが何らかの警告音である事を見抜いて、身を硬くした。遠くから響く重低音が一回。続いて甲高い打撃音が連続して庭の方から届く。時刻を知らせる類のものとは考えづらい。
「この音は何だ？」
女に視線を戻すと、彼女は顔を青くして震える事で呟いた。
「敵が、魔族の軍団が攻めてきたのです」

四話　正義

「マゾク？」
エルはそう言って、窓から身を乗り出した。論理リソースを視力ノイズキャンセルに集中させる。遠方に、戦闘機らしき影が見えた。
「マゾクとは、オールドに属する類のものか？」
「オールド？　あの、申し訳ありません。何の事なのか――」
エルは怪訝な表情を浮かべ、女を見つめた。
――オールドを知らない？
「わからないなら良い。私の戦術デバイスはどこにある？」
思考を切り換え、女を問い詰める。女は困ったような表情を浮かべた。
「センジュツデバイス？」
「武器だ。金色の球体をしている」
「申し訳ありません。私の一存では――」
話にならない。エルはそう判断して、女を睨みつけた。
「先程の手紙を要約しろ」
女はおどおどとした様子を見せた後、手紙に視線を落とす。
「はい、あの、突然の召喚と契約について謝罪いたします。契約に基づき、エル様にはリンラード連合王国の力になっていただきたいのです。代償として、女王ドリス・ベルセリウスの全てが捧げられます」
エルは女を見つめた後、窓の外に視線を向けた。青い空。広がる緑の大地。それらを見つめながら、じっと動きを止める。
「エル様？」
女が戸惑ったように名前を呼ぶ。エルは窓の外を見つめたまま、口を開いた。
「ここがどこなのか、私は知らない。お前達が何なのか、私は知らない。何故私がここにいるのか、私は知らない。ただ、天に広がる

空は、私が知るそれよりも透き通ったものだ。大地を覆う緑は、美しく、儚い。これは、守られなければならない。随分と遠くへ来てしまったようだが、そう、私はこの景色を穢したくない」
エルはそう言って、女に向き直った。
「力が欲しい。そう言ったな。私は軍人だ。私は戦う事しかできない。大義がお前達にあるならば、私は無償で力を貸そう。話せ。正義はどちらにある？」
エルはそう言って、女を見つめた。女の瞳が動揺するように揺れる。
「……正義など、ありません。魔族は領土を広げるため、私達は土地を守るために戦い続けているだけです」
エルはそれを聞いて、口端を吊りあげた。
「そう、戦に正義など必要ない。宿の恩もある。お前達の指揮に入ってやる」

五話　飛竜

「それは、真か？」
強い風と重厚な戦曲が響く中、ドリス・ベルセリウスは幼さの残る美しい顔に歓喜の色を浮かべて、目の前に跪く侍女を見下ろした。
「はい。ドリス様の指揮の下に入る、と確かに仰いました」
ドリスは少し考える素振りを見せた後、小さく頷いた。
「よくやった。契約に基づいた介入は極力避けたい。すぐにセンジュツデバイスを用意し、招集しろ」
ドリスはそう言って、去るように手で合図する。振動で彼女が全身に着込んだ壮麗な鎧がカシャリと音を立てた。
「エル・フルビット。百年ぶりの旅人か」
呟いて、ドリスは城壁の前に整列する何千もの兵士を見つめた。その多くが槍を持った歩兵であり、右サイドに軽鎧を着こんだ魔術師の集団が配置されている。後方に位置する軍楽隊が重厚な楽曲を奏で、ドリスの率いる軍勢には重々しい雰囲気が満ちていた。
「ドリス様。もう暫く旅人様と交渉なさった方がよろしいのではないでしょうか？」
近くにいた初老の男、カラン・ジュジュビオンが、ドリスに耳打ちする。ドリスは首を振った。
「このダラントを落とす訳にはいくまい。それに旅人が指揮に入ると宣言した以上、戦闘中に新たな問題が出たとしても契約に基づいて介入を果たせば良い」
「……一度介入を果たせば、ドリス様も相応の介入を受けるでしょう」
カランが低い声で言う。ドリスは、ああ、と素っ気なく頷いた。
「わかっている。だが、それ以外に方法はあるまい。ダラントの攻防が終わった後に旅人と話し合いの席を設けたところで無意味だ」
それに、とドリスは憂いを含んだ瞳で城壁の向こうを見つめた。

「それに、そうした利害を除いたとしても介入は極力避けたいものだ。父や先代の旅人に申し訳がつかない。事が起これば私が直接交渉に当たる」
カランはドリスの意を汲み取ったように、深々と頭を下げた。
そこで、遠くからドリスを呼ぶ声が響く。
「女王様！」
振り返ると、十名ほどの兵士に連れられたエル・フルビットの姿があった。
小さい。それが、エルに対するドリスの第一印象だった。齢は十四歳ほどか。しかし、幼さの残る顔は引き締まり、その瞳には歴戦の戦士を思わせる鋭い眼光が宿っている。そして、華奢な身は迷彩服で包まれ、右手には金色の球体のようなものを持っている。
「エル・フルビット、よく決断してくれた。我々は、貴殿を歓迎する」
エルは何も言わず、ドリスを評価するように見つめた後、周囲の兵士に目を向ける。
「……ますます不可解だ。お前達は、槍を用いて敵を破るつもりなのか」
「安心するが良い。強力な魔術部隊もいる」
ドリスが補足するように言うと、エルはますます顔をしかめた。
「お前達の運用方法が私には想像できない」
「当然だ。貴殿の世界と、我らの世界の理は大きく異なる。暫く、私とともに戦場を観察して欲しい」
ドリスはそう言って、背後のカランに視線を向けた。
「カラン。飛竜を用意しろ」
命を受けたカランが懐から笛を取り出し、口に含む。直後、甲高い音が場に響いた。
「ヒリュウ？」
エルが反芻した時、上空から大きくな黒い影が舞い降りた。

六話　魔術師の軍勢

エル・フルビットは突如上空から舞い降りてきた小型の竜を見上げて、反射的に戦術デバイスを構えた。
エルの口腔から可聴域を逸脱した超音波が放たれ、戦術デバイスがその音声を受理する。球体の形をしていた戦術デバイスがすぐにライフルのような形をとり、エルはそれを竜に向けた。
「待て！　我々の飛行補助生物だ。危険な生き物ではない！」
ドリスが叫ぶ。エルはドリスを一瞥し、竜に戦術デバイスを構えたまま動きを止めた。
飛竜と呼ばれた小型の竜はエルの行動に怯えたように高度を上げた後、ドリスの近くへゆっくりと舞い降りる。
「オールドではないな。この生き物は何だ？」
「飛竜だ。上手く調教すれば、人を運ぶ事ができる。貴重な種なんだ。あまり手荒な事は控えてくれ」
ドリスはそう言って、体高一・五メートルほどの飛竜の首元を撫でた。飛竜が心地よさそうに小さな泣き声を上げる。
「見た事がない生物だ。この巨体を持ちあげるほどの力を、この翼が生み出せるのか？」
エルは飛竜をしげしげと眺めた。それほど頑丈そうでない脚に、細い胴体と長い翼。顔は小柄で、獰猛な印象は受けない。
「飛竜が空を飛べるのは魔力があるからだ。翼はコントロールの為の道具でしかない」
ドリスは説明しながら、飛竜の背中に飛び乗った。そして、エルに手を差し伸べる。
「さあ。私の後ろに乗ってくれ」
エルは一瞬躊躇した後、ドリスの手を取った。そして、飛竜の背中に飛び乗る。一瞬、飛竜が重さに耐えかねたように腰を落としたが、すぐに態勢を立て直して、姿勢が安定する。

「さあ、そろそろ魔族の攻撃が始まる頃だ」
ドリスが腰から剣を取り出し、それを頭上高く掲げる。装飾の入った剣で、実用的なものではなさそうだった。
「ドリス・ベルセリウスはここにダラランドの守護を約束する。彼と彼女の加護があらんことを！」
不意に、ドリスの音声が増幅回路を通したかのように大きく響く。頭に直接音声を叩きこまれたかのような感覚を覚え、エルは反射的に聴覚情報を遮断した。
「彼と彼女の祝福を！　彼と彼女の呪いを！　彼と彼女の――」
聴覚情報を遮断したにも関わらず、ドリスの声が頭の中に響く。エルは意識的に聴覚情報を再開放し、音声成分の分析に入った。
そこで初めて軍楽隊の奏でていた楽曲が終わっている事に気づく。周囲は、恐ろしい程の静寂に包まれていた。特異な音声成分は検出されない。それどころかドリスらしき音声成分も見当たらなかった。しかし、頭の中にはドリスの声が確かに響き渡る。
「――前進せよ！　勝利を我らがリンラード連合王国に！」
そこで、空気が爆発した。整列していた軍勢が一斉に雄叫びを上げ、前進を開始する。
「高度を上げる。掴まっていろ！」
喧騒の中、前で飛竜の手綱を持ったドリスが叫ぶ。反射的にエルがドリスの腰に手を回した直後、飛竜の前足が大きく上がり、エルは後ろに振り下ろされそうになった。そして、飛竜の翼が大きく羽ばたき、その体が弾かれたように空中へと飛び出す。
「見ろ！　魔族の軍勢だ！」
ドリスが叫ぶ。エルはドリスに捕まりながら、急速に遠ざかっていく大地に目を向けた。そして、論理リソースを視覚処理につぎ込む。
斜めに見える大地に、黒い軍勢が見えた。およそ二キロメートルほど先。空中にも敵の飛竜らしき影が見える。
「随分と多いな」

数は一万ほどだろうか。それに比べ、ドリスの率いる軍勢は三〇〇〇ほど。
「数では負けているが、我々には五〇〇の魔術師がいる！」
風に負けないよう、ドリスが大声をあげる。
「あそこに別の飛竜がいるだろう！　あれが魔術軍団の統率を図るクラウディオ将軍だ！」
大地から目を離し、どこまでも続く青空に目を向ける。ドリスの言う通り、別の飛竜が二〇メートルほど隣を並走するように飛行し、その背中には壮年の男が乗っていた。
「見ろ！　魔術軍団が攻撃準備を始めるぞ！」
再び大地に目を向ける。軽装の魔術軍団が前に出て、数人のグループに別れて何やら儀式を始める。エルはそれを嫌そうに見つめた。
「あれは何の儀式だ！　戦の神にでも祈っているのか！」
「違う！　攻撃準備をしているんだ！」
耳元で轟々と風が唸る中、ドリスはそう叫んで手綱を引っ張った。飛竜がゆるりと旋回し、微かに高度を落とし始める。
「そろそろだ！」
二つの軍勢の距離が五〇〇メートルを割った時、六人ほどで固まっていた魔術師集団の一つが閃光に包まれた。そして、その頭上に巨大な火球が生まれる。
「理解した！　魔術師とは、技師のことだな！　あの杖のような兵器を扱う為の特殊技能を有しているのか！」
エルは納得したとばかりに頷いて、事態の成り行きを見守った。
魔術師集団の頭上に掲げられた巨大な火球が、前方に広がる魔族の軍勢に向かって放出される。火球は大きく弧を描きながら、魔族集団の前列に着弾し、巨大な爆発を起こした。着弾点の周りにいた魔族の集団が衝撃で次々となぎ払われるのが見える。
流石に槍で戦うつもりではないのか、とエルは奇妙な安堵を覚えながら、魔術師軍団が次々と火球を創りだすのを見て、感嘆の息を吐いた。

七話　エル・フルビットの記録

「魔術と言ったな！　なるほど！　民族的な儀式を目的とした集団ではなく、比喩表現か！　攻撃に要するインターバルは、エネルギー変換の類、あるいは冷却期間だな！」

エルは風切り音に負けないように叫びながら、眼下に広がる戦闘を見守った。

魔術師の軍勢から放たれる火球が次々と魔族の軍勢へ着弾し、敵をなぎ払っていく。しかし、魔族は怯む様子を見せず、その距離を縮めていく。

エルは視覚処理に対する論理リソースの振り分けを増大させ、敵魔族に焦点を当てた。人型の何かが見える。十二歳頃の子どもほどの身長。顔は醜く、その胴体は軽鎧に覆われている。手には、二メートルほどの槍。小さい身体に似合わず、それなりの膂力があるらしい。同様の姿をした歩兵がざっと五〇〇ほど固まり、その集団の後方には弓矢を所持した集団が控えている。

「あれがマゾクか！　人間ともオールドの無人兵器軍とも似つかない！　あれは何だ！」

「魔に属する者たちだ！」

ドリスの簡素な説明を聞き、エルは遠方の魔族をじっと眺めた。魔族の後方に位置する弓兵が一斉に弓を構えるのが見える。

「くるぞ！」

エルが叫んだ直後、一斉に矢が放たれ、それがドリスの軍勢を襲った。一拍遅れて、ドリス側からも矢が放たれ、魔族側へ降り注ぐ。

「魔術に比べ、随分と原始的な攻撃方法だな！　あの杖のような兵器を揃えるには、相応のコストを要するのか！」

「そうだ！貴重な材料がいるし、そもそも魔術を扱える者が圧倒的に少ない！」

二人が会話をしている間に、二つの軍勢の歩兵が衝突し、乱雑な

戦闘を開始する。エルはそれを興味なさそうに見つめてから、思案するように目を瞑った。
「私を投入しろ！　代わりに当面の衣住食の保障を要求する！　相応の戦果をあげてやる！」
「衣住食の保障はもとより、ドリス・ベルセリウスの全てをお前にやる！　これは契約だ！」
ドリスが振り返って叫ぶ。エルは小さく笑って、飛竜から飛び降りた。
「おい！」
頭上からドリスの声。エルはそれを無視して、戦術デバイスに向かって音声入力を行った。球形をしていた戦術デバイスが巨大な傘のように広がり、エルの落下速度を緩める。
みるみるうちに大地が接近し、エルは着地態勢を取った。直後、衝撃とともにエルの身体が大地に叩きつけられる。しかし、エルは何事もなかったかのように、そのまま駆けだした。
エルが着地した地点は二つの軍勢の側面に位置し、魔族集団まで一〇〇メートルほどの距離があった。魔族集団に視線を走らせた後、戦術デバイスに命令を与えて、その姿をライフルのような形に変形させる。
エルはそれを無言で構え、トリガーを引いた。銃口から翡翠の光弾が放たれ、魔族集団へと直進する。直後、着弾地点に閃光が走り、魔族集団が吹き飛んだ。側面からの強襲に、魔族集団が崩壊を始める。エルはそれを興味なさそうに見つめてから、再びトリガーを引いた。
「ロスト・ポジションから一四時間三四分が経過した。オールドから未知の攻撃を受けたのか、私は現在見知らぬ平原にいる。私を保護した組織との契約に基づき、現在未知の勢力と交戦中。敵は、脅威ではない。私は――」
エルは魔族の集団に一方的な攻撃を加えながら、端末に向かって何かを記録するように口を開いた。

「――いまだオールドの侵食を受けていないこの地域を守る為、規定に基づいた独自行動を開始する」

八話　対空戦

脅威ではない。

エルは魔族の群れを次々と吹き飛ばしながら、そう思った。

トリガーを引く。魔族が吹き飛ぶ。戦術デバイスの冷却を待つ。

トリガーを引く。魔族が吹き飛ぶ。戦術デバイスの冷却を待つ。

単純な作業を続けながら、エルは魔族集団に向かってゆっくりと歩き始めた。エルの射程から逃れようとするように魔族の集団が後退を始めるも、別方向から降り注ぐ魔術軍団の火球によって、その統率が急激に乱れていく。

エルはその光景を無感動に眺めながら、チラリと上空を見上げた。いくつかの機影が接近してきている。視覚処理へのリソース配分を増大させると、飛竜に乗った魔族が見えた。早い。

魔族への攻撃を中止し、警戒態勢をとる。

飛竜の数は六。

エルは微かに迷った後、その肩部から二つの小さな球体を上空へ放出した。

遠隔警戒システム。戦闘能力は持たず、ただカメラから得た視覚情報をエルに流すだけの機械。統合参謀本部の支援を受けられない以上、遠隔警戒システムの正確な座標は得られないが、エルとは別の角度から対象を確認し、全ての視覚情報を統合することで航空生物の立体的な座標を得る事ができる。

エルは遠隔警戒システムを遠方に飛ばしながら、ライフル型の戦術デバイスを構えて、飛竜が射程に入るのを待った。六体の飛竜が散開し、エルを囲むようにして高度を落としてくる。

エルはじっと六体の機動を観察しながら、直進してくる一体の飛竜を狙ってトリガーを引いた。反動とともに光弾が飛竜へ向かって撃ちだされるが、飛竜の横を通り過ぎて青空へと吸い込まれていく。

エルは迫りくる飛竜を見て、地を蹴った。それを追うように飛竜

が滑空を始める。
回避は、間に合わない。
そう悟り、エルは足を止めて飛竜に向き直った。低空を飛行する飛竜がみるみる距離を詰め、飛竜の上に乗った魔族が三メートルほどの突撃槍を構えるのが見える。それに対抗するようにエルは真正面から飛竜に向かって駆けだした。
論理リソースの全てを情報処理に回す。飛竜の上に乗った魔族が驚いたような表情を浮かべるのが、はっきりと見えた。
飛竜との距離が二十メートルを切ったところで、大地を蹴って大きく跳躍する。そして、エルは慣性に身を任せたまま魔族のもとへ飛び込み、その突撃槍の穂先を掴んだ。
魔族の顔が驚愕に歪む。
エルはそれを横目で見ながら、掴んだ突撃槍ごと魔族を飛竜の上から引きずりおろした。
飛竜の悲鳴。
エルは魔族とともに地面に叩きつけられた直後、すぐに起き上がって上空を見上げた。飛竜が二体急降下してくるのが視認できる。エルは考えるよりも先に魔族から奪った突撃槍を上空に向かって放った。上空三〇メートルほどまで接近していた飛竜が乗手ごと貫かれるのが遠隔警戒システムからの映像で見える。それから、冷却の済んだ戦術デバイスを別の飛竜に向け、撃つ。
爆発。
上空で仕留めた二体の飛竜が墜落するのを遠隔警戒システムで確認しながら、先程飛竜から引きずり下ろした魔族のもとへ向かった。
魔族はぐったりとして動かない。ライフル型の戦術デバイスを突き刺すように頭部へ振り下ろし、その息の根を止める。それから、エルは上空に残る三体の飛竜を見上げた。飛竜は警戒するように旋回を繰り返して、一向に高度を下げようとはしない。
戦意を失っていると判断し、エルは再び地上の魔族集団に目を向けた。そして、戦術デバイスを構えて、トリガーを引く。

射程内の領域を完膚なきまでに制圧しながら、エルは魔族集団に向かって死の前進を始めた。

九話　王者のごとく

「終わりが見えない」
エルと同様に幼さを残しながらも、どこか達観したような雰囲気を持つ少女は、ライフル型の戦術デバイスを華奢な身体に抱えながら、呟くようにそう言った。
エルはそんな彼女を見つめながら、静かに首を横に振った。
「そうだ。オールドは絶対に姿を見せない。無人兵器群をいくら破壊しても、この闘争が終わる事はない」
「どうすれば終わりを迎えられる？」
瓦礫の山で、彼女は灰色の空を見上げる。
「私達は、単騎では負けない。オールドの腰抜けどもとは違う。しかし、物量には勝てない。防御能力を遥かに上回る飽和攻撃。あるいは、エネルギーの枯渇。私には勝利が見えない」
「ケイ……」
エルは彼女の疲れた顔を見て、ついと視線を外した。
「悠久の時を無益な闘争につぎ込むのかと思うと、気が狂いそうになる」
ケイはそう言って、戦術デバイスを手放した。
戦術デバイスが球体に戻って、カラン、と音を立てながら瓦礫の山を転がっていく。
その二日後、エルは自らの手でケイの生命活動に終止符を打った。

エルは戦術デバイスを構え、魔族を殲滅し続ける。
最小のエネルギーで最大の効果を発揮する地点を計算し、トリガーを引く。
防御能力を遥かに上回る飽和攻撃を受けないように、エネルギーが枯渇しないように、敵を殲滅し続ける。
何かの鳴き声。

直後、エルから逃れようと後退を続ける魔族の群れから、何かが飛び出した。獣のような姿形の何かが、エルに向かって真っすぐに駆けてくる。その背には、突撃槍を構えた魔族の姿。

エルはその姿を確認すると同時に、地を駆けた。獣の進行方向を防ぐように動く。

獣が距離を詰めて、正面からエルに迫る。

その背で、魔族が突撃槍を大きく突き出すのが見える。直後、エルはそれを戦術デバイスで受けとめた。そして、迫る獣の頭部に蹴りを放つ。獣の頭が吹き飛び、上に乗っていた魔族が投げ出される。頭から落下し、致命傷を負ったのがわかった。

息をついて、魔族に視線を走らせる。先程のような後退ではなく、統率のとれた撤退を始めるのが見えた。

追撃をしかけるかどうか思案し、エルは結局何もしなかった。魔族が後退していくのを眺めながら、ドリスの陣営に向かって足を進める。

価値は示した。それなりの歓迎を受け、当面の生活は保障されるだろう。それに、あらゆる情報を引き出すのが楽になる。

旧カゴシマ領での戦いで何が起こったのか。そしてオールドの影響を受けていないこの地域が何なのか、調べなければならない。

オールドの影響を受けていないなら保護し、オールドの影響を受ける前に統治する必要がある。

前方に集まる兵士の集団が歓声をあげるのが見えた。

エルはそれに向かって王者のごとく戦術デバイスを空高く掲げ、足を進める。

そして、自らの価値を誇示するように、トリガーを引く。

閃光が上空へ放たれ、祝砲のように巨大な轟音が響く。

畏敬と畏怖を与えるように、エルは立ち止まって叫んだ。

「日本軍第三陸上師団長、Ｌ－ｆｆｂ２！　個体名エル・フルビットがお前達に限りない勝利を与えてやる！」

十話　ドリス・ベルセリウスの不安

ドリス・ベルセリウスは眼下で行われる一方的な殺戮を見て、息を呑んだ。

魔術師は通常六人で一つの単位として行動し、長い詠唱を経て攻撃魔法を繰り出す事ができる。しかし、エルはたった一人でそれ以上の火力を見せつけながら、魔術師を上回る速度で攻撃を繰り返している。

「火力面は魔術師四十二人分ほどか」

呟いて、手綱を引く。飛竜の高度がゆっくりと下がり、エルの姿が良く見えるようになった。

六体の飛竜がエルを片づけるように散開するも、うち三体の竜魔士が一瞬で葬られ、残った三体の竜魔士が警戒するように高度をあげていく。

その手際の良さに感嘆の息を吐きながら、ドリスは自軍の動きを見やった。

エルが攻撃を加えている左翼は前線を押し上げているものの、反対の右翼はじりじりと後退を続けている。

魔術師軍団を右翼に持ってくるか、と思案したところで、敵の軍勢が一斉に後退を始める。そして、その後退を援護するような矢の嵐。

「追撃の必要はない！　退かせろ！」

魔力を込め、全軍に命令を送る。

左翼が崩壊する前に、撤退を決めたらしい。秩序立った撤退に対しての追撃は、逆効果になることもある。

全体の大まかな被害状況を確認しようとした時、閃光と轟音が響いた。遅れて、まだ大人になりきれない少年の声が響く。

「日本軍第三陸上師団長、Ｌ－ｆｆｂ２！　個体名エル・フルビットがお前達に限りない勝利を与えてやる！」

魔力を使用した精神感応ではないにも関わらず、その声は遥か遠くのドリスへはっきりと届いた。
次いで、歓声が爆発する。
ドリスはその光景を眺めて、警戒するように目を細めた。
戦闘能力に長けているだけでなく、効率良く人心を掌握する術を知っている。
契約に基づいた介入は絶対に許されない。一度不審を買えば、エルはその持てる力の全てを持って、ドリスの全てを奪うだろう。
ドリスは緊張した面持ちで手綱を操作し、降下を始めた。
それに気付いたように空を見上げたエルと目が合う。
一瞬の交差。
すぐにエルは興味を失ったように視線を外し、群衆に向かって手を振る。
ドリスはエルを眺めたまま、エルの隣に飛竜を降ろした。そこでようやくエルはドリスを認識したように体ごと向き直り、言うのだった。
「周辺の地図、加えて王国の概要、魔術師の運用方法、所有する海軍の規模について、情報を要求する」
それは、命令。
女王ドリス・ベルセリウスは、それを了承する他に選択肢を持たなかった。

十一話　一年

「その前に、私は貴殿に謝罪しなければならない」
エルが通された部屋で、ドリス・ベルセリウスは開口一番にそう言った。
エルは豪華な部屋に素早く視線を走らせてから、ドリスと机を挟んだ椅子に腰かける。
「謝罪？」
「召喚と契約についてだ。貴殿をこの世界に呼んだのは、私だ」
ドリスは緊張した様子で言う。
エルはじっとドリスの瞳を見つめた後、無言で先を促した。
「貴殿を呼び寄せた後にすぐ、私は魔術を用いて貴殿を拘束し、契約を迫った。貴殿は、衰弱した状態でそれを了承した。契約に基づき、貴殿の逗留が約束される。両者が契約を破棄するまで、貴殿は元の世界に帰還できない」
「話が見えない」
エルは短く言う。ドリスは動揺したように瞳を揺らした後、迷うように言葉を紡ぐ。
「どこから話すべきか、私にはわからない。そう、旅人と呼ばれる存在がいる。時空移動魔術によって、世界の壁を超える存在。我々は、古来より異なる世界に属する旅人を呼び出し、数多の危機を脱してきた」
エルの指が、とんとん、と机を叩く。
「それが、私だと？」
「そう。我がリンラード連合王国は今、大きな危機に瀕している。私は旅人の召喚を決断し、貴殿を呼びだした。契約の代償として、私、ドリス・ベルセリウスの全てが貴殿に捧げられる。私は契約によって貴殿の命令に背く事ができない。好きにするが良い」
エルは思案するように目を瞑り、小さく息をついた。

「女王とは名ばかりの生贄か」
「その認識は誤りだ。私達は正当な女王にして、実際的な支配力を持つ。私は危機を脱する為に、自らを代償に貴殿をこの地に縛りつけるしかなかった」
エルはドリスの震えた声を聞きながら、考える。
「オールドと呼ばれるものがいる」
「オールド？」
「そう、オールド。私の敵。あの日、かつてカゴシマと呼ばれた大地で、私はオールドと絶望的な戦闘に身を投じていた。そこに、お前の言う召喚とやらが働いたのだろう。私は絶望的な状況から離され、この豊かな土地に辿りついた。ドリス・ベルセリウス。私は怒ってなどいない。逆だ。召喚に関しては感謝している」
ドリスが意外そうな表情を浮かべる。
ただし、とエルは言葉を繋げた。
「ただし、契約とやらは別だ。私は二十六体しかいないドライバ型だ。エルの記号を与えられた私は、スタブ型の部下を統率し、オールドを殲滅する義務がある。逗留は不可能だ」
「命尽きるまで、この地に縛りつけるつもりはない。一年間。それが過ぎれば、私は契約を破棄して貴殿を元の世界に返す」
そう言って、ドリスは頭を下げた。
「これは、全てこちらの我儘だ。だが、聞き入れて欲しい。逗留中の生活の保障はもちろん、出来る限りの融通を図る。その力を、我が連合王国に貸してくれ」
ドリスの言葉を咀嚼しながら、エルは目を瞑った。
脳裏に、柔らかい風が蘇る。
広がる原っぱ。透き通るような青空。
それから、自らを代償にしたドリス・ベルセリウスの双眸の先に宿る何か。
「一年……」
呟いてから、ゆっくりと瞼を開き、ドリスを見つめる。

「偶然とはいえ、お前は私を危機的な状況から救った。恩義には、相応の対価をもって応えねばなるまい。エル・フルビットがお前に限りない勝利を約束してやる」
そう言って、エルは立ちあがった。
「ドリス・ベルセリウス。契約によって、お前のコントロール権は私にあると言ったな。逗留期間を短縮する為、お前にも動いてもらうぞ」
エルはそう言って、不敵な笑みを浮かべた。

◇◆◇

「カラン！」
ドリス・ベルセリウスは、執務室に入るなり、感情を削ぎ落としたような声で側近の名を呼んだ。
「ここに」
机で書類に向かいあっていたカラン・ジュジュビオンが顔をあげ、立ちあがる。
「契約の内容については一部を伏せ、旅人はそれに合意した。これから一年間、旅人は我が指揮に入る。あるいは、私が、旅人の命を受ける」
カランの表情が凍る。
「案ずるな。いまのところ、そうした兆候は見えない。いざとなれば、介入が残っている。不穏な動きを見せれば、ドリス・ベルセリウスが直々に始末する。それで満足だろう？」
ドリスはそう言って、疲れた笑みを見せる。
そして、その笑みの奥で考えるのだった。
あのエル・フルビットを危機的な状況に追いやったオールドと呼ばれる勢力は、いかなる化け物なのだろう、と。

十二話　リンラード連合王国

空は蒼く、地平線の彼方まで続いている。
エル・フルビットは客室の窓から見える景色を眺めながら、遠隔警戒システムを飛ばし、地平線までの距離を測っていた。
エルが位置するのは二階。エルの視点はおよそ高度四メートル。地平線までの距離は、およそ七キロメートル。よほど歪な形をしていない限り、この世界は地球と同程度の大きさを持つようだった。
測定を終え、遠隔警戒システムが戻ってくるのを待ちながら青空を眺める。霧のような雲がいくつかあるだけの晴天。エルはその光景をじっと眺めながら、ぼんやりと時を過ごした。
すべきことが山ほどある。しかし、エルは突き抜けるような青空から視線を外す事ができなかった。
別の世界。それを裏付けるように、天を覆う青空。見慣れた灰色の空はどこにも見当たらない。
ドアを叩く音。この国の風習は、エルの世界と恐ろしいほどまでに酷似している。エルはようやく窓から視線を離し、扉の方に目を向けた。開いた扉から、ドリス・ベルセリウスが顔を見せる。
「よく眠れたか？」
「私はお前達のように長時間の睡眠をとる必要がない。昨夜は星を見ていた」
「星？」
「そう。この世界が本当に我々の世界と違うのか、確かめたかった。それで、ようやく納得した。この世界は正真正銘の異世界だ」
そう言って、窓から高速で飛び込んできた二つの球体を両手で受けとめる。エルはそれを肩部にはめ込んで、怪訝な顔をするドリスに向き直った。
「今のは何だ？」
「目だ。私の視神経はとても良く伸びる」

曖昧に答えを濁し、それで、とエルは言葉を続ける。
「それで、王国の概要。魔術師の運用方法。所有する海軍の規模。そして、周辺の地図の情報提供について、用意はできたか？」
「ああ。地図の用意がある。ついてきてくれ」
ドリスはそう言って、部屋を出た。エルも黙って、それに続く。
長い廊下。人影はない。
先を行くドリスが一つの部屋に入る。一拍遅れて、エルも中に入った。
大きな長机があり、装飾の入った椅子が並んでいる。会議室のようだった。
「まず、これが地図だ」
ドリスが、机にのった地図を指差す。大きい。
「これがリンラード連合王国。リンラード島にて抗争を繰り返していた三つの国家が議会を統一し、今の姿になった。そして島の南部。ここが魔の領域と呼ばれる場所。魔族の支配地域だ」
縦長の楕円形のような島を指し、ドリスが説明する。
「現在、魔族の侵攻はどこまで進んでいる？」
「島の六割が既に支配下に置かれている」
ドリスはそう言って、島の中央部からやや北に外れた地点を指差す。
「ここが私達が駐留しているダラント。山に囲まれた西部と東部を繋ぐ交通の要所だ。ここを抑えられれば、連合王国の経済が崩壊を始める事になる」
「橋頭保というわけか。なるほど。保有している海軍の規模は？」
「十四積」
「……帆船か？」
「そうだ」
それを聞いたエルは、考え込むようにじっと目を瞑った。
「今まで、対外的な抗争はなかったのか？　海の向こうからの侵略経験は？」

「遠い昔に四度あった。だが、嵐によって全て迎撃に成功している。この辺りの海は荒れやすいんだ。もう何十年も攻撃は受けていない」
「……私の国にも似たような事があったよ。神風と呼ばれた嵐」
エルは懐かしむように言って、それからじっと地図を睨みつけた。
「あの魔族たち、余力を残していたな。近いうちにまた来るつもりか？」
「恐らく。魔族はダラントの南部にあるターリアントまで下がり、態勢を立て直しているところだろう」
「……兵の準備はできるか？」
「可能だ。その為に、ダラントまで赴いたのだ」
それを聞いたエルは、静かに笑みを浮かべた。
「魔術師の運用について確かめたい事がある。それに、敵の戦略を観察したい。準備が出来次第、早々に攻めるぞ。一年間を無為に過ごす訳にはいくまい」

十三話　行動原理

「下がれええっ！　後ろにクイーンがいるぞ！」
灰色の空の下、瓦礫山の上で、押し寄せる機械の蟲を戦術デバイスで吹き飛ばしながら、エル・フルビットは叫ぶ。
一メートルほどの蟲がうじゃうじゃと蠢く後方。そこに、体高六メートルはある巨大な蜘蛛のような機械がいた。
クイーン。陸上制圧用の無人兵器。脚は恐ろしく細いが、その本体は分厚い装甲で覆われ、戦術デバイスの攻撃を受け付けない。戦術デバイスから放たれるエネルギーの奔流をもろともせず、高速で接近してくる。
十五人の部下に後退命令を出しながら、エルはクイーンの前に並ぶ蟲たちに戦術デバイスを向けたまま地を駆けた。
「ワイヤーポイントまで全力で下がれ！　絶対に捕まるな！」
エルの叫び声を掻き消すように、後方から轟音が響く。クイーンの制圧攻撃が始まったのだ。クイーンの頭部に取りつけられた六門の機関砲から閃光が迸り、後退するエルたちの足元に銃弾の雨が降り注ぐ。
エルの足に何発かが着弾し、肉片と破片が弾ける。エルは苦痛に顔を歪めながら、前方に見える瓦礫の影に飛び込んだ。そして、力の限り叫ぶ。
「やれ！」
その瞬間、クイーンの足元からワイヤーが現れ、その細い脚を絡め取るように動いた。クイーンの動きが鈍くなり、それに合わせるようにワイヤーが引っ張られる。
微かに抵抗するように前進を始めたクイーンの巨体が徐々に傾き、轟音とともに地面に崩れ落ちていく。それを確認したエルはライフル型の戦術デバイスを抱えて、瓦礫の影から飛び出した。クイーンの機関砲がエルを狙うように動くが、それより早く戦術デバイスの

トリガーを引く。六門ある機関砲の全てが破壊され、クイーンから殲滅能力が完全に失われる。同時に、エルの背後から次々とスタブ型の部下が飛び出し、クイーンの後方に残ったオールドの無人兵器群に対して反撃を始める。

閃光と轟音に包まれながら、エル・フルビットはクイーンの破損した機関砲を掴み、力ずくでそれを引き抜いた。内部と繋がった機構部分がむき出しになる。エルはそれに向かってトリガーを引いた。

爆発。クイーンの内部が連鎖的に破壊されていき、クイーンの瞳から光が失われていく。

エルはクイーンが完全に機能を停止した事を確認してから、孤独な女王の亡骸を踏み越え、ケイ・フルビットの遺した戦術デバイスを構えながら、前方で制圧領域を広げていく部下の元へ向かった。

ダラントの南部に位置するターラントは、盆地の中に点在する村群の総称だ。

ダラントと同様に、リンラード島の北部と南部を繋ぐ交通の要所であり、北部と南部へ食料を供給する穀倉地帯でもある。

そのターラント北端のミネイル山麓全面に魔族は防塁を築き、ダラントより南下してきたリンラード連合王国軍を待ちかまえていた。

エルは遠隔警戒システムを通して敵の防御陣地を視認し、暫く思案した後、突破を決めた。

「時間をかけるとまずいのだろう？」

天幕の中で長い髪を結っているドリスに声をかける。

「ああ。水に余裕がない。突破に時間がかかるようならば、水源の豊富な北部に一度退くべきだろう」

髪を結い終わったドリスが立ちあがり、エルの元へ近づいてくる。

「それに、ターラントに広がる穀倉地帯を取り戻さなければ、北部の都市部が飢える事になる」

エルは頷いて、自嘲気味に笑った。

「兵站の問題について、他のドライバ型なら何らかの解決手段を講じたかもしれない。だが、私の専門は戦闘だ。特にお前達の運用方法については、正しい理解がない。一年間の間に、一国の事情を理解して正しい対策を立てられるとも思わない。私の軍事行動が経済的な問題に繋がるなら、その都度言ってくれ。私は、無知だ」

ドリスが意外そうな表情を浮かべる。エルは補足するように言葉を付け足した。

「それに、これから行う戦闘には実験の意味がある。非効率な戦術によって、お前の兵たちは不要な死に直面するだろう。それを、理解しておけ。そして、納得して欲しい」

エルはそう言って、空から高速で戻ってくる遠隔警戒システムを受け止めてから言葉を続けた。

「その代わり、ターラントを取り戻してやる。行くぞ。出陣だ」

そして、思うのだった。

かつてエルが自らよりも強大なオールドの無人兵器群を狩った時と同様に、いつか魔族は数の利を生かし、自らを罠にかけようとするだろう、と。

――物量には勝てない。防御能力を遥かに上回る飽和攻撃。あるいは、エネルギーの枯渇。私には勝利が見えない。

ケイの遺した戦術デバイスを抱きかかえながら、エルは勝利を模索していく。

エル・フルビットは依然として人間の心を持っていた。

十四話　ベルタ・ウィザード・オーベリ

「理解できません」
ベルタ・ウィザード・オーベリはそう呟いて、不満そうに隣の部下に愚痴を零した。
「旅人様の力は確か。でも、御心がわからない」
「オーベリ様。そうは仰っても、旅人様の御心など私達にわかるはずもありません。我々は、ただ与えられた任務を遂行するのみ。そうではありませんか？」
愚痴を零された年上の女部下は窘めるように苦笑して、そう言う。
ベルタは納得いかない様子のまま、小さく息をついた。
エル・フルビットにより、最も優秀な魔術師の班を用意しろ、との命令が下り、ベルタ率いる第一七魔術師小隊に白羽の矢が立ったのがつい三〇分前の出来事。今、ベルタたちは大急ぎで天幕をたたみ、出発の用意を整えていた。
――自殺行為だ。
これから敵の防御陣地へ正面から攻撃をしかける、とエルは言っていた。
たった六人で正面から攻撃を行うなど、ありえない。戦略的な判断ならまだしも、正面からぶつかるだけでは犬死にしかならないだろう。
「準備が整いました。出発いたしますか？」
女部下が声をかけてくる。ベルタは頷いて、五人の部下を見渡した。
「行きます」
短く宣言し、ベルタは先頭に立って足を進めた。後から五人の魔術師が追随する。
駐留し続けている連合王国軍の天幕の間を縫いながら、エル・フルビットが待つ奥の天幕に向かう。

「私、旅人様の龍顔を拝見させていただいた事がありませんの。とても楽しみです」
後ろから、女部下の陶酔しきった声。
ベルタは一抹の不安を覚えながら、エルの待つ天幕の前で足を止め、すうっと息を吸った。
「旅人様。準備が整いました」
頭を垂れ、告げる。
直後、ベルタの周囲に影が差した。反射的に顔をあげると、頭上から飛竜が降下してくるところだった。
飛竜から一人の人影が降りたち、ベルタの前に着地する。その人影を見て、ベルタは怪訝な表情を浮かべた。
――子ども？
齢はまだ一五ほどか。幼さを残すものの、どこか冷え切った瞳がベルタを射抜く。
「ベルタ・ウィザード・オーベリ。そして、第一七魔術師小隊の諸君。招集に応じてくれた事に感謝しよう。このエル・フルビットが暫くの間、諸君を直接率いる事になる」
ベルタは目を見開いて、エルを見下ろした。
「あなたが、旅人様？」
「そうだ」
エル・フルビットはベルタの無礼な問いに小さく笑って、それで、と周囲を見渡した。
「あまり時間をかけたくない。早速だが、出発する。ついてこい」
ベルタたちに背を見せ、エルが歩き始める。ベルタは一瞬躊躇した後、エルの後を追って駆けた。
そして、エルの後ろ姿を見ながら思う。
――小さい。
こんな子どもが、旅人なのか。
落胆とともに、絶望が胸の中に広がっていく。
戦略も戦術もなく、ただ子どもの思いつきで危険な任務に就かさ

れるのだろう。そう思うと、やるせなかった。
ベルタは稀有な魔術師の血を引いて、貴族として生まれた。
魔力に恵まれた彼女は、それを連合王国の為に行使すべきだと小さい頃から教えられ、鍛錬を繰り返し、十七歳にして名誉あるガンナーの地位に就いた。そして数いる魔術師の中でも優秀なガンナーとして信用を集め始めたばかりだった。、
それが、終わるかもしれない。
ベルタは唇を噛みしめ、黙々と山の中を歩き続けた。
「腰を落とせ。そろそろだ」
前方のエルが小声で言う。
ベルタは杖を構え、草木に隠れるように身を低くした。そして、周囲の様子を窺う。まだ何も見えない。
前方のエルがゆっくりと前に進んでいく。ベルタもそれに続いた。
「敵だ」
突然エルが動きを止める。先を窺うと、七〇メートルほど先の木々が開かれ、そこにバリケードのようなものが築き上げられているのが見えた。
「攻撃しろ」
エルが振り向いて、命令する。
「バリケードを、ですか？」
「そうだ」
エルの言葉に頷いて、杖を持ち直す。
そこでベルタは杖を握る手が汗でべったりと濡れている事に初めて気付いた。小さく息を吸って、後方の部下に合図を送る。五人の部下が一斉に詠唱陣形を組み、口を開く。
「彼は願う。彼女は願う。その意思を持って、民を攻撃することを。彼は悲しみを、彼女は憎しみを――」
詠唱が始まり、五人の魔力がベルタへ流れ込み始める。ベルタは慎重に魔力の流れを杖先に集めていき、それを木々の向こうに見えるバリケードに向けた。

「――彼と彼女は地獄に何を見る。何を成す！」
詠唱が終わると同時に、ベルタは叫んだ。
「ここに主の力を！」
杖先に巨大な火球が現れ、熱風が吹き荒れる。
ベルタは力の限り、杖を突いた。
轟々と火球が火柱をあげながら、敵のバリケードへと吸い込まれていく。
爆発と熱風。
バリケードの前方に着弾し、衝撃でバリケードの表面が崩れ落ちる。
「下がります」
攻撃が外れた事を確認したベルタはすぐにそう進言した。しかし、エルは退かない。
「攻撃を続けろ。引き続きバリケードを狙え」
そう言って、傘のような形をした戦術デバイスを構えたエルが前方に立つ。
「もう一度言う。攻撃を続けろ」
エルの命令に従い、後ろで五人が詠唱に入る。ベルタは信じられないと言った思いでエルを睨みつけた。
「すぐに反撃が来ます。抑えられません」
「私が抑えこむ」
エルが宣言した直後、バリケードの向こうから無数の石が放たれた。そして、木々の間からベルタたちの元へ降り注ぐ。
ベルタは悲鳴を上げ、身を落とした。
「やれ！」
エルの怒声。
顔を上げると、前に立ったエルがベルタを構うように戦術デバイスを構え、石を弾き返しているのが視界に入る。
「――彼と彼女は地獄に何を見る。何を成す！」
後ろで詠唱が終わる。

ベルタは身をかがめたまま杖を構え、敵のバリケード狙って叫んだ。
「ここに主の力を！」
杖先から放出された火球が弧を描き、バリケードへと着弾する。
バリケードの向こうに並んでいた魔族が熱風によってなぎ払われていくのが見えた。
「行くぞ！」
エルが前方へ飛びだす。それを狙ったように空へ無数の矢が放たれた。途端、エルの持つ戦術デバイスの形がライフル型へと変わり、空へ向けられる。
「詠唱を開始しろ！」
エルはそう言って、トリガーを引く。轟音とともに翡翠の閃光が空に瞬き、空に浮かんだ矢群が吹き飛んだ。
「来るぞ！」
壊れたバリケードの向こうから、槍を構えた十あまりの魔族が突撃してくるのが見える。
「彼は願う。彼女は願う。その意思を持って、民を攻撃することを。彼は悲しみを、彼女は憎しみを――」
後方から詠唱。
ベルタは前方の小さな背中を見つめた後、コクリと頷いて杖を構えた。
絶望的な状況にも関わらず、いつの間にか彼女の心から絶望と恐怖の色は消え去っていた。

十五話　経験、あるいは才覚

「――彼と彼女は地獄に何を見る。何を成す！」
詠唱が完了するのを横眼で確認しながら、エルはベルタの動きに注目した。
「ここに主の力を！」
ベルタの杖が前方へ向けられ、そこに火球が現れる。そして、ベルタが杖を突きだすと同時に火球が高速で放たれ、放物線を描きながら、敵魔族集団の斜め前に着弾した。衝撃と熱風で三人の魔族が吹き飛ぶが、残りの七人は何事もなかったかのように槍を構えたまま突撃してくる。
――やはり、精度が低い。
「次の詠唱を開始しろ！」
エルは叫ぶと同時にライフル型の戦術デバイスを構え、トリガーを引いた。閃光が残った魔族を呑みこみ、跡形もなく吹き飛ばす。
「また来るぞ！」
バリケードの残骸の向こうから、五〇人規模の大群が現れる。そして、太鼓を叩くような重低音が何度も響いた。
「下がるぞ！」
そう言って、エルは駆けだした。魔術師の六人も詠唱を中断し、それに続く。
木々の間を抜けながら、口腔から連続的な高音を発する。それに応えるように、前方から笛の音が響いた。
「もうすぐで援軍が来る！　それまで走り続けろ！」
叫び、背後の魔族へ向けてトリガーを引く。土砂が舞いあがり、それが魔族に降り注ぐの見えた。魔族の動きが一瞬止まる。
「走れ！」
魔族の足が予想以上に早い。そして、魔術師の足が予想以上に遅い。距離が詰められ始める。

エルは舌打ちして、足を止めた。
「詠唱を開始しろ！　迎え撃つ！」
そう言って、トリガーを引く。魔族の先頭集団が吹き飛ぶが、四〇近い残りの魔族がエルに殺到する。
「旅人様！」
後方から悲鳴。それを無視するように、エルは超音波を発した。
戦術デバイスが音響信号を受理し、その姿を傘のような形に変える。
「私が抑えている間に詠唱を開始しろ！」
エルは魔族の集団へ向け、地を駆けた。前方の魔族がエルに向かって槍を突き出すが、傘型の戦術デバイスを前方にかざし、槍ごと魔族を吹き飛ばす。そして、エルはそのまま的集団の中に突っ込んだ。そのまま戦術デバイスで槍もろとも魔族をいなし、敵の軍勢を切り崩していく。
「おおぉぉぉおおおぉぉ！」
戦場にエルの雄叫びが響いた。

◇◆◇

ベルタは、雄叫びを上げて敵集団を粉砕していくエルの姿を呆然と見つめた。
出鱈目だ。その小柄な身体からは想像できないほどの膂力と、見た事もない武器によって敵魔族の軍団を蹴散らしていく様は圧巻だった。
「――彼と彼女は何を成す！」
部下の詠唱が終わり、魔力がベルタへ流れ込む。
「エル様！」
叫んだ直後、エルが射線を譲るようにして横に飛ぶ。
「ここに主の力を！」
放った火球が木々の間を抜け、魔族集団へと着弾し、その場が爆ぜる。横に飛んだエルは熱風から逃れるように地面を転がり、そし

ていつの間にか持ち替えていた別の武器を構え、それを炎上する魔族の集団に向けた。放たれた閃光が魔族を呑みこんでいく。
「これが、旅人様……」
あっという間に全滅した魔族を見つめて、ベルタは呟いた。焼け野原に立つエルが振り返り、勝利を宣言するように戦術デバイスを掲げる。
「不要な危険に晒して悪かった。敵を軽んじていた私の落ち度だ。諸君はよく働いてくれた。私の想像以上だ」
そこまでエルが言った時、後方から声がした。振り返ると、ドリスの率いる兵たちが向かってきているのが見えた。
「援軍は必要なかったか。また敵戦力を見誤った」
エルは小さく呟いて、ベルタに目を向ける。
「ベルタ・ウィザード・オーベリと言ったな。そして、その下に集まる誇り高き五人の魔術師たちよ。諸君は、強い。その圧倒的な火力は、我が軍勢の要と言える。しかし、その強さは積み重ねられた経験によって築き上げられたものだ。あるいは、才覚か。それらは、誇るべきものだろう。だが、リンラード連合王国が勝利を掴む為には、経験も才覚も持たない者が戦果をあげられるように変えていかなければならない。それを実現する為に、私はこれから何度も諸君を危険に晒すだろう。それを、理解して欲しい」
ベルタは、エルの瞳に宿った強い輝きに目を奪われ、息を呑んだ。
――ただの子ども？　違う。その華奢な体躯には信じられないほどの膂力を秘め、その瞳はベルタが知らない世界を見つめている。そして、その頭脳にはリンラード連合王国を勝利に導く道筋が出来ているに違いない。
ベルタはその場に跪き、右手を左胸に当てた。そして、深々と頭を下げる。
ドリス・ベルセリウスにしか向けた事がない忠誠を。
そして、誰にも捧げる事がなかった信仰を。
それに値する人物なのだと、ベルタ・ウィザード・オーベリは理

解した。
そして、エルは跪くベルタの横を通り過ぎ、エルのもとへ集結する軍勢に向かって叫ぶ。
「前進せよ！　剣を！　誇りを！　お前達の全てを掲げるがいい！
勝利を我らに！」
歓声が爆発する。
ベルタはその喧騒の中、じっと祈るように動かなかった。

十六話　神の類型

ターラント北端に広がるミネイル山麓の全面に築かれた魔族の防御陣地。

それを、リンラード連合王国軍が蹂躙していく。

ドリス・ベルセリウスは飛竜に乗って上空から戦闘の様子を観察しながら考えた。

正面から突撃しているにも関わらず、損害が少ない。時折、魔術師を前面に押し出し、試すような動きを見せるのが気になるが、全体を通しては士気も高く何の問題も見られなかった。

エル・フルビットは純粋な戦闘能力だけでなく、最低限の指揮能力も有しているようだった。

ただ、魔族も馬鹿ではない。計画的な後退を続け、致命的な損害は出さないように動いている。防御陣地を放棄することにも躊躇がないようだった。恐らく、ターラント防衛で兵力を失う事を避け、ターラントの南に位置するグレイゴッゴ要塞まで下がって堅実に戦うつもりなのだろう。

お互いに大きな損害を出さないまま前線が上がっていき、遂に防御陣地を突破する。そこで魔族集団は撤退を決め、一部の後部を切り離し、ターラントの奥深くに消えていった。

こうして、ミネイル山麓における戦いは不気味なほど呆気なく終わり、リンラード連合王国軍はミネイル山の奥に広がる穀倉地帯、ターラントを取り戻す事に成功した。

落ちついてから飛竜を何匹か飛ばしてターラントの様子を見たところ、村や畑が焼かれた後はなく、魔族が取り戻しに来るつもりである事が窺えたが、すぐにグレイゴッゴ要塞からすぐに出てくることはないだろうと判断し、ターラントに束の間の安息が訪れる事となった。

◇◆◇

「この世界は、どこまでも平和だ」
夕焼け色に染まる広大な牧草地を見て、エル・フルビットが呟く。
隣に立つドリス・ベルセリウスは怪訝そうにエルの顔を見つめた。
「今日戦争があったばかりだろう」
「それでも、平和だ。私の国で起こった戦争は、これほど生易しいものではなかった。大地と大空の色が失われるほどの大戦。それがずっと続いている」
エルはそう言って、目を瞑った。
ドリスはその悲しそうな横顔を見て、思わず息を呑んだ。
まだ幼さの残る顔とは裏腹に、エル・フルビットの精神は既に極限まで擦りきっているように見えた。
恐らく、この旅人は生を焼いているのだ。
この旅人の身体が如何に強靭であろうとも、その精神はこの生き方に耐えられないに違いない。
エル・フルビットは、緩やかな破滅の道を進んでいる。
――何が、そうさせたのだろう？
「一体、お前たちは何と戦っている？」
自然と口から疑問が零れた。
夕陽で赤く染まったエルの顔が、ゆっくりとドリスへ向けられる。
「わからない」
エルはそう言って、天を仰いだ。
「わからない？」
「そう。わからない。私達にははっきりと認識できない何かがいた。一部の者が、それらに取りこまれた。そして、争いが際限なく拡大していくことになった」
エルの言っている意味が、ドリスには理解できなかった。
「認識できない何か？」
「そういう存在がある。見えないし、触る事もできない。だが、そ

れは確かにそこに存在する」
「神か？」
口から自然と神という単語が出た。エルが驚いたように振り返り、そして小さく笑う。
「そうかもしれない。あるいは、その類型か」
そこでエルはゆっくりと立ち上がり、歩き始めた。
ドリスも無言で、それに続く。
燃えるような夕焼けに向かって歩きながら、ドリスの中で急速にある想いが芽生えていった。
この旅人がその身を焼き続けるならば、自らも同様に生を焼いてみせよう。
この精神が摩耗し、擦れ切れようとも、緩やかな破滅の道が同時に救済の道でもあるならば、私はその道を選び取るべきなのだろう。
「彼の祝福を。彼女の呪いを」
ドリスの祈りは、夕焼けに溶けていった。

一章　鋼鉄の戦士　完
二章へ続く

一話　どこまでも愚かな

灰色の雨が降る中、エルはかつて軍神と呼ばれた同胞を見つめ、静かに戦術デバイスを構えた。

「アール・フルビット！　何がお前をそうさせた！」

アールと呼ばれたかつての仲間は何の反応も見せず、ゆらりとエルに近づいてくる。その身体はエルと同様に華奢なものだが、その顔を異様な仮面が覆い尽くし、表情を窺うことができない。

「常しえの生命に魅入られたか！　オールドに与えられた命など、仮初のものでしかないことを知れ！　無限の旅路の果てに待つのは破滅のみ！　それを忘れたか！」

アールと呼ばれた少年は何の反応も見せないまま、戦術デバイスを構えて疾駆を始める。エルは舌打ちして、常人では聞きとる事が不可能な叫び声をあげた。

音響信号を受理した戦術デバイスが筒型に変化する。エルはそれを構え、引き金を引いた。擲弾がアールに向かって高速で飛翔する。そして、エルはそれに追随するように地を蹴った。

先行した擲弾を防御する為に、アールの戦術デバイスから無数の金属片が放たれる。爆発。粉塵が舞う中、エルは戦術デバイスを巨大な突撃槍に変化させ、アールに向けて突っ込んだ。

衝撃。

粉塵の中、エルの身体が強烈な力によって弾き飛ばされる。

受け身をとる余裕もないまま、エルは瓦礫の山に叩きつけられた。

粉塵の中からアールがゆっくりと現れる。

そして、アールの戦術デバイスがエルに向けられ、ピタリと止まった。

その瞬間、エルは雄叫びをあげた。

「ビィ！　今だ！」

エルの合図とともに、轟音が響いた。

アールの戦術デバイスから放たれた光がエルの腕を呑み込む。
同時に、空から降り注いだ無数の光がアールの身体を貫いた。
閃光の中、アールの頭が弾け飛ぶのが見える。
「軍神といえども、二機のドライバ型を相手にすることはできまい」
空から女の声。
見上げると、巨大な機械の翼を纏い、獰猛な笑みを浮かべた少女が下りてくるところだった。どこか猛禽類を連想させる雰囲気を持つ彼女は、ドライバ型の中で唯一防空戦力をまとめる存在だ。
「愚かな。オールドの操り人形となり果て、軍神Ｒの記号を捨てるか」
ビィは吐き捨てるようにそう言って、頭と片足を失いながらも地を這うアールを見つめた。
「エル、どうする？　持ち帰り、解析するか？」
「どうせ、何も分かるまい。ならば、この手で仮初の命を断ってやるのがせめてもの手向け」
エルはランス型の戦術デバイスを残った左手で持ち直し、アールの元へ向かった。
そして、無言でランスを振り下ろし、その身体を砕く。
言葉はいらない。アールは既にエルの知るアールではなくなっていた。
ここにいるのはオールドの配下になり果てた哀れな操り人形に過ぎない。
何度もランスを振り下ろし、その身体を砕いていく。
もう起き上がる事がないように。もう生き返る事がないように。
それが同胞への、かつての師への手向けとなる事をエルは嫌となるほど知っていた。
それが師の教えだった。
彼の教えに従い、彼を壊し続ける。
何度も何度も無言でランスを振り下ろし、その存在を完膚なきまで破壊していく。

ギィ、と何かが軋みをあげた。
それがアールの無残な残骸から響いたものか、自身の何かが悲鳴をあげる音なのか、エルには判断がつかなかった。

◇◆◇

エル・フルビットは夢を見ていた事に気づくと同時に、勢いよく立ちあがった。
柔らかい風が吹く。それで、エルは自身がリーランド連合王国内のターラントと呼ばれる穀倉地帯にいる事を思い出し、小さく息をついた。
穏やかな緑の大地。それを眺めながら、太陽が既に真上に上がっている事に気づく。
昼寝をし過ぎた。エルは軽い後悔を覚えながら、のどかな土地を歩き始めた。
ターラントの視察をしたい。そう言って、今日一日の自由を得たのだった。
時間は限られている。休んでいる暇はない。
エルは黙々と歩き、最寄りの小さな集落を目指した。
荒れている。
歩きながら、エルはこの穀倉地帯に対し、そう評価を下した。
リンラード連合王国はこの事態を把握しているのだろうか。
ドリスは、この状況をどう打破するつもりなのだろうか。
そう考えて、何も考えていないのだろう、とすぐに結論に達する。
軍隊は無尽蔵に食料を欲する。
軍は略奪紛いのことをしなければ、行軍することができない。
魔族を退けるという大義名分がある以上、普通の統治者であれば搾取に問題を覚える事はない。
ドリスも恐らく、そうした統治者の一人だ。
その予想を裏付けるように、エルが辿りついた集落には活気がな

かった。
疲弊しきった民衆を見て、エルは確信した。
この状態が続けば連合王国全体が疲弊することは避けられない。
リンラード連合王国は海洋国家だ。外に収入を見出す事も難しい。
だが、とエルは思った。
農政には絶対に関与すべきではない。特に、地球と異なる世界なのだから、経験的な知識を基に行動するのは危険だ。それに、兵站は長期的な問題であって、短期的な問題にはなりづらい。エルが逗留する一年間の間に何らかのリターンが得られる可能性は低い。
エルは暫く考え込んだ後、答えを保留することに決めた。
実験地区を作り、そこでいくつかの指導をするだけならリスクは低いだろう。
消極的な介入を考えながら、集落を歩く。
時折、怪訝な視線が向けられたが、誰にも話しかけられる事がなかった。
痩せた土地を歩き、考える。
恐らく、中間的な搾取構造があるのだろう。
ドリスの関与しない、政治的な搾取構造。
個を満たすだけの、無駄な機構。
甘い。
この世界の人間は甘い。
地獄を知らないのだ。
だから、個の利益を求める。
全体の利益を損ねても、個には被害が及ばないほどの余力がある。
エルの世界はそうではなかった。
個を優先すれば、全てが崩壊する。
そういう瀬戸際の世界だった。
個の利益など、考える余裕がなかった。
同様に、極端に生産力の低い古代の原始共同体に於いても平等が存在したという。

それが余剰生産力を得てから搾取や奴隷といった個の利益追求が始まった。
どこまでも愚かな。
エルは軽蔑するように集落を見渡しながら、小さく息をついた。
だから、オールドという存在があそこまで肥大化していったのだろう。
奇妙な無力感を覚えながら、エルは集落を去り、痩せた大地を歩いた。
日は、まだ落ちない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8620l/

異世界と鋼鉄の旅人

2011年11月15日22時52分発行